



令和3年度研究助成 【音楽振興部門】より

ブラジルの日系人社会における日本音楽実践の歴史とその文化的意義の研究 — 1980年代を中心に —

東京音楽大学附属民族音楽研究所
特任研究員

瀧上ラファエル広志

1. はじめに

日本音楽は、日本だけで愛好されているわけではありません。外国人でも個人的に日本音楽が好きな人はいますが、個人の問題ではなくて、ひとつの社会全体で日本音楽の営みが続いている社会集団があります。それは、世界各地にある、日系人の社会です。

日本では、19世紀後半に海外への移民が始まりました。このとき、移民先である米国や南米など、海外へ尺八や箏や三味線などの和楽器が持ち込まれました。現在では、海外に住む日系人の人口は推定約380万人ですが、その中で、ブラジルの日系人の人数が最大で、190万人を超えています。ブラジルでは、1908年から現在まで、110年以上の移民の歴史を持ち、その過程で、日本音楽が実践されてきました。

ブラジルの日系社会では、箏曲や地歌、また長唄や民謡のような伝統音楽、そして演歌や歌謡曲やJ-POPのポピュラー音楽など、多様なジャンルの音楽が嗜まれています。和楽器を中心とする演奏会が開催されることがあれば、日本祭りや盆踊りなどのような日系社会の大きなイベントの中で日本音楽が流れることもあります。また、日本舞踊や浪曲や演劇に関わって和楽器が演奏されることもあり

ます。しかも、日系人は日本音楽に限らず、ヴァイオリンやピアノなどの西洋音楽の世界に関しても、さまざまな音楽教室や音楽団体を設立しています。その中には有名な演奏者になった日系人も少なくありません。

このように、日系社会の音楽活動は長い歴史があり、内容も多岐にわたり、多くの文化研究者からも注目されてきました。例えば、ブラジル日系社会を取り上げた研究の嚆矢は、Dale Olsen (1982, 2004) で、ブラジルを含めて南米の日系社会における日本音楽とアイデンティティーについて、幅広い研究を行いました。その後、細川周平 (1995, 2008) や Alice Satomi (2004) らがブラジルの日系社会における日本音楽とアイデンティティーの問題を取り上げ、日系ブラジル人の日本音楽への関心は次第に高まりつつあります。

しかしながら、伝統的な邦楽や日本民謡で使われている和楽器に焦点をあてて日系人の活動や考え方を扱った研究はあまりありません。実は、第二次世界大戦前後、〈日本音楽研究会〉や〈都山流尺八楽会ブラジル支部〉や〈ブラジル日本民謡協会〉など、和楽器に関する様々な団体が開設されたことが知られています。このように、ブラジルでの邦楽器や民謡の愛好者の活動はすでに半世紀を超える歴史と広がりがあ

ります。これらブラジルの日系社会での和楽器に関わる音楽活動の歴史に光をあてて、その文化的意義を考えてみようというのが今回の研究の目的です。

2. 研究目的と対象

本研究では、尺八、箏、三味線の三つの和楽器に着目し、1980年代を対象として日系人たちの間で維持され、伝承され、変容してきた日本音楽とそれを巡るアイデンティティーについて明らかにします。

1980年代というのは、ブラジルにおいて日本音楽の団体が複数開設された時期で、日本音楽実践が本格的に展開していく曲がり角にあたる変革の時代にあたると思っています。当時、前述の日本音楽団体に加えて、〈ブラジル邦楽協会〉や〈ブラジル郷土民謡協会〉などの邦楽及び民謡に関わる団体が沢山誕生しました。しかも、日伯交流が盛んであって、芸術¹や教育²、またアーティスト³やスポーツ⁴のような団体がブラジルへ進出しました。一方、ブラジル側から日本に留学する日系人が増え、また民謡やカラオケ大会の優勝者は日本の大会に出演し、故

-
- 1 主に民謡、邦楽、舞踊、浪曲、落語。
 - 2 日本語教師や大学の教授など。
 - 3 細川たかし、北島三郎、八代亜紀の有名な歌手がブラジルで公演を行った。
 - 4 主に相撲、空手、柔道、野球など。

郷に錦を飾る人もいて、日系社会では大いに喜ばれたものでした。

このように1980年代はブラジルの日系社会における日本音楽実践の大きな転換点にあたると思われますので、この前後の歴史とその文化的意義について明らかにすることが重要だと考えています。

3. 研究方法

具体的には、史料調査及びインタビュー調査を計画しています。史料としては、1980年代にブラジルで発行された日本語版の新聞が国立国会図書館に所蔵されています。これらを対象に、三つの和楽器（尺八・箏・三味線）に関する記事や広告などを調査・分析します。国立国会図書館で見ることのできる、本研究に関わる新聞は下記の6紙です。

	新聞名	調査期間
1	パウリスタ新聞	1982. 10. 30 ~ 1989. 12. 00
2	日伯毎日新聞	1980. 01. 00 ~ 1989. 12. 00
3	サンパウロ新聞	1982. 08. 03 ~ 1989. 12. 00
4	機関紙日系コロニア	1980. 01. 00 ~ 1984. 03. 31
5	虹→日本語普及センター会報	1986. 06 ~ 1987. 12、 1988. 01
6	週刊時報	1981 .12. 21 ~ 1989. 12. 11

新聞の調査では、尺八・箏・三味線に関する以下の情報を含む記事を抽出します。

- 1) 団体や協会など
- 2) 人物、役職
- 3) 流派名や曲名
- 4) イベントに関する情報（イベント名、場所、主催など）

新聞は最も優れた同時代史料であり、当時の新聞に見られる和楽器に関する活動のニュース報道や話題の記事、演奏会広告、楽器・レコード広告などを通して、日系人にとって日本音楽の役割、意義はどのようなものであったのか、どのような変容があったのかを明らかにしていきます。

インタビュー調査では、同時期にブラジルで音楽活動していた日系人（現在日本に在住している人を含めて）にインタビューして、日本音楽を通じたアイデンティティーの形成過程を調査します。

4 今後の展望

本研究が対象とする1980年代には、ブラジルの日本伝統音楽界に今も大きな影響力を持つ団体が開設され、日系人の音楽活動にとって変革の時代であったと言えます。日本音楽は「日本だけのもの」ではなく、110年以上の歴史を持つブラジルの日系社会にも深く関わりがあります。立場を変えてみると、日本の音楽研究にと

っても、海外における和楽器の歴史を調べることに価値のある研究になるに違いありません。

この研究を実施することによって、両国の文化交流の推進力となるよう貢献していきたいとします。そのため、調査結果については、ブラジルに赴き、和楽器（尺八、箏、三味線）のワークショップを開催し、研究の報告をするとともに、より多くの日系人とつながることさらなる研究の発展につながることを期待しています。

このワークショップでは、ブラジルの製管師に作っていただいた尺八を用いる予定です。その理由は、ブラジル製の尺八は日本からの輸入品に比べて安価でありながら、遜色ない優れた音の出せる尺八が数種あることを紹介し、ブラジルでの尺八の普及に貢献したいと考えています。

研究結果の発表及び和楽器の演奏会は、東京音楽大学付属民族研究所にて行う予定です。演奏会では、尺八・箏・三味線を演奏する在日日系人と共演します。

謝辞

本研究に関して助成を賜りました、一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団に感謝の意をここに表します。

参考文献

測上 ラファエル広志

2020『ブラジルにおけるジャポネジダデス形成としての尺八学習』東京音楽大学大学院音楽研究科博士論文（東京音楽大学リポジトリ）

細川 周平

1995『サンバの国に演歌は流れる－音楽にみる日系ブラジル移民史』（東京：中央公論社）

2008『遠きにありてつくるもの－日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』（東京：みすず書房）

国立国会図書館

[2021]「海外発行の日本語新聞の所蔵（常設展2021年10月21日）」

https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-1138.php

Olsen, Dale, オルセン、デイルA.

1982 “Japanese Music in Brazil.” *Asian Music* 14/1, 111-131.

1989「海外日系共同体の音楽」ト田隆嗣 訳、蒲生郷昭ほか（編）『日本の音楽・アジアの音楽別巻1』岩波講座 編（東京：岩波書店）147-158.

2004 *The Chrysanthemum and the Song: Music, Memory, and Identity in the South American Japanese Diaspora.* (Florida: University Press of Florida)

Satomi, Alice

2004 *Dragão confabulando: etnicidade, ideologia e herança cultural através da música para koto no Brasil.* (Salvador: Universidade Federal da Bahia)